

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 4 月 18 日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23531004

研究課題名(和文)「褒め方・叱り方のタクト」 - 教育力育成と信頼の場の創出に関する実証研究

研究課題名(英文) The Takt of Praise and Scolding: Empirical Research on the Creation of an Environment for Nurturing Learning Ability and Trust

研究代表者

鈴木 晶子 (Shoko, Suzuki)

京都大学・教育学研究科(研究院)・教授

研究者番号：10231375

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,900,000円、(間接経費) 1,170,000円

研究成果の概要(和文)：本研究はコミュニケーションにおけるタクトの働きについて、言語・身体・パフォーマンスの観点から理論的に分析するとともに、教育力育成と信頼の場の創出に資するようなタクト養成プログラム開発を行った。理論研究としては、教育者と教育される側との相互作用がなされる「場」の創出という観点から分析することの必要性について、東洋的な思想も取り入れた分析の必要性について明らかにした。事例研究では、地域の子育て支援の関係者から意見聴取を行った。また、「振り返り」活動を通じた自己分析のまなざしの形成について、母親の言語活動を中心に、子育てへの思いや日常の子どもとのコミュニケーションについて反芻する過程に注目し分析した。

研究成果の概要(英文)：This Project offers a theoretical analysis of the linguistic, corporeal aspects of the functioning of takt in communication, aiming at the development of a program for fostering takt as a means for creating an environment for nurturing learning ability and trust. This research has been to demonstrate that there is a need for a form of analysis that incorporates the insights of oriental philosophy, working from a perspective focused on the creation of an environment in which educators and those being educated can mutually influence one another. We have conducted interviews with local people involved in child-rearing. Regarding the formation of a perspective of self-analysis through "reflective activity", we have conducted analysis focusing on the process of mothers' rumination, mainly in linguistic activity, in their feelings about child-rearing and everyday communication with their children.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学

キーワード：タクト 歴史人類学 パフォーマンス ミメーシス 場 コミュニケーション 教育力

1. 研究開始当初の背景

児童虐待や育児不安など親の教育力の低下が指摘される状況のなかで、親子間コミュニケーションの質の向上が強く求められている。子育て支援の質向上という点から、子育てにおける親の認知過程に注目した研究としては、例えば注意深い観察 (Parental Monitoring) の研究がある (Peterson, Ewigmann & Kivlahan 1993)。だが親子間コミュニケーションでは、認知だけでなく判断、反応など様々な能力が複合的に働いている。また、親は子どもに一方的に影響を及ぼすわけではなく (Goodnow & Collins 1990, 朴・杉村, 2006)、双方の影響関係をみていく必要がある (菅野 2001)。本研究では、その相互の関係性を創る働きをもつタクトの観点から、親の教育力 (親力) を研究することとした。タクトは状況に最も適切な判断を下すことのできる能力であり、とりわけ教師が具えるべき判断・行為能力としての教育的タクトは、教師が具えるべき「教育術の最高の宝石」として、1802年に J.F. Herbart が教師養成の要として提示して以来、主に、教授学や教育心理学、教育方法学の領域で研究されてきた (Blochmann 1950, Muth 1962, 徳永正直 2004)。しかし、タクトのもつ触覚やリズム感覚の働き、感情制御や感情表現の機能、言語の修飾的表現技法、パフォーマンスにみる演技的行為における表現能力など、人類学や音響学、心理学、脳研究など、隣接する人間諸科学において近年、注目を集め、タクト・ルネサンスのような状況を呈している。タクトは教育的関係の成立要素として、欠くことのできない能力であると同時に、経験値を上げていくことを通して、一種の「わざ」として練磨可能なコミュニケーションの技法であると考えられる。本研究では、研究代表者がこれまで行ってきたタクトの働きとその養成方法に関する思想的・歴史人類学的手法による研究成果をもとに、親子間の関係の場の創出に着目し、教育力育成をタクトの観点から研究しようという意図で進めることとなった。

2. 研究の目的

本研究は、親の教育力 (親力) 育成のための具体的かつ有効な方策を提示することを目的としている。親子間コミュニケーションの質の向上が求められるなかで、そのスキルに関する情報は氾濫している。一方、親の教育スキルに関する研究は心理学を中心として領域ごとに別個に研究されてきており、各研究の知見が関連づけられておらず、その全体像を把握することが困難な状況にある。教育スキルや判断・行動の能力、さらに教育観をも含んだ親の教育力を体系的に捉える本研究では、褒める・叱るに典型的にみられる親の教育的思惟様式や自らの働きかけについての反省 (振り返り) の過程に着目し、タクト養成という観点から、親の教育力養成の支

援プログラム構築に向けた調査・研究を行うこととした。具体的には以下の事項についての調査研究および教育哲学・歴史人類学の観点からの分析を目的として行った。

- 1) 親の子どもへの働きかけというパフォーマンスにおける親の感情制御と言語使用という観点から、日本とドイツの間での文化比較を行う。そこから、親の意識や教育観と、文化的特性との関連についての分析を行う。
- 2) タクトを一種の「わざ」として練磨する可能性について、19世紀以来の教育学における思想系譜を改めて検討する。さらに、西田幾多郎の「場」の思想をはじめ、技芸の修練にみる経験値の向上という観点から、東洋思想の伝統に根差したタクト養成プログラムを構想する。
- 3) 今日、欧米圏でいわれるリーダーシップ養成の観点と本研究での教育力育成とを照らし合わせて検討を加えることにより、感情制御やイメージ訓練、パフォーマンス的思考法による状況把握やヴィジョン形成など、ワークショップ形式でのタクト養成プログラムの具体化を目指す。

3. 研究の方法

本研究は、タクトやわざの修練に関わる東西の思想系譜を、親の教育力育成の観点から抽出してくる理論的研究と、教育哲学的・歴史人類学的手法により、日独文化比較の観点から、親子間コミュニケーションにおける感情制御や言語による表現技法を、言語・身体・パフォーマンスの観点から分析するエスノメソドロジーによる調査をもとにした分析という大きく分けて2つの方法によって進められた。日独の家庭における親子間コミュニケーションについては、幸福感比較調査で参与観察したデータの集積がある。さらに、親への聞き取り調査も加え、本研究では、褒める・叱るという場面に注目した調査を実施するとともに、子育て支援の関係者に対する聞き取り調査を実施した。また、リーダーシップ養成プログラムの開発に携わるアメリカ、ドイツ、韓国の研究者に聞き取り調査を実施し、文化的背景や組織集団の違いによって、リーダーシップに対する捉え方、その養成方法について、比較検討を行った。そのほか、ワークショップ形式での教育力育成のプログラム開発を念頭に、幼稚園児および小学校低学年児の子どもをもつ母親に2週間にわたって、自らの親としての子どもの関わりについて、感情、言語の表現の仕方や関係の質について反省 (振り返り) 活動を実施してもらい、記録に取る作業を行ってもらった。その日について振り返る作業と同時に、明日、自分や子どもにかけたい言葉など、未来へのヴィジョン形成や予期的なイメージを描く作業を実際に行ってもらうことで、経験値を向上させていくようなプログラム開発の手掛かりを探る調査を行うこととした。

4. 研究成果

(1)理論研究の成果としては、タクトの働きについてはこれまで、教育者側の教育状況の理解や判断、行動の能力という観点からのみ分析されてきたが、教育者と教育される側との相互作用がなされる「場」の創出という観点から分析することの必要性について、東洋的な思想も取り入れた分析の必要について明らかにした。東洋的なわざの修練では、「経験の地平拡大としての熟達過程」が重要視されている。経験値を向上させていくための仕組みとして、「場」のもつ意義は大きい。親子間コミュニケーションを成り立たせていくには、その感情や言葉のやり取りの基盤となる「場」を創出していくことから始めなければならない。しかし、親が子に、あるいは子が親にといった一方的な働きかけによって、親子の間の「場」が成り立つわけではない。親は子との関わりを通して「親」となるのであり、子もまた、親との関わりを通して「子」となるのである。このいわば生物的な意味での親が、親子という信頼の場を共有した実存的かつ社会的な意味での「親」となっていく過程においては、その「場」の状況における多義的かつ多様な意味を理解し、それに応答していくパフォーマンスの能力、言い換えれば人類学的意味における演技的行為の能力が求められる。それは、言葉による指示や説明という次元だけでなく、言葉の彩やニュアンス、声色、表情、しぐさ、身振りなど、自己と他者の間の沈黙や言語を介さない形で表現されるさまざまな要素が関係してくる。「相手の存在に注目し認めるまなざし」を送る、またそれを感じ取るという往還作用について、雰囲気や気分など「場」を支え、親子の「間(あわい)」からコミュニケーションをとらえる視点の重要性が確認できた。東洋的な思想を鏡としてこの主客身分ないし自他共鳴の関係性を抽出してきたが、この特質は必ずしも東洋のコミュニケーションにのみ存在しているものではない。見様見真似の学び(ミメシス)や、演技的・儀礼的な行為を通じた相互行為については、人類学的観点から、欧米圏でもフィールド研究の蓄積がある。その意味で、人類学を広義の「人類学的思考」として捉えて、その視座を親子間コミュニケーションやタクトの働きの再解釈に役立てていくことができるだろう。

(2)教育哲学的・歴史人類学的手法によるフィールド調査のデータ分析を通して明らかになったのは以下の諸点である。

ドイツにおいては、言葉を介した親子間コミュニケーションに重点が置かれていたこと、また、親の態度や指示内容の伝達の際に、親の権威を感じさせるアプローチが目立った。他者への従順や規範意識の醸成という点からの親の働きかけが言葉および態度から明確に見て取れた。

日本はドイツに比較して、言葉を介したコ

ミュニケーションよりも、親子間に流れる雰囲気や気分の醸成のためのアプローチに親の側の工夫が鮮明にみられた。言葉かけについての親の配慮という点でも、ドイツでは指示と事実説明を基礎としていたのに対し、日本では、子ども感情や気分、その場の雰囲気を整えていく点に重点を置く傾向にあった。日本では情調的な親子間の基盤を形成する方向へと親の意識が傾く傾向にあり、そのため非権威的態度で、友達や仲間のような調子での働きかけを敢えて試みる様子が浮き彫りとなった。

日独間の以上の相違は、子育て関連事業者および親への聞き取り調査を通して同様にみられた。このことは、例えば、欧米型リーダーシップ教育の基礎には個の確立に主眼が置かれ、他者の認知と尊重が、自他の明確な区別と対峙の緊張感に支えられ、自尊心を醸成していく点と深く関係している。

(3)タクト養成については、米国・国際戦略研究所 CSIS におけるリーダーシップ養成プログラムなど既存のプログラムを検証した。欧米のリーダーシップ研究も、組織運営論の最近の研究や、国際的観点からの文化比較を取り入れ、組織ないしシステムの実際への落とし込みという観点から、近年では、リーダーシップの様態の多様性に注目する方向へと向かってきている。先導型リーダーシップだけでなく調整型リーダーシップの意義を検証する、あるいは、また、リーダーシップと不可分のフォロアーシップのあり様の分析をする必要への認識も高まってきていることが分かった。本研究では、幼稚園児および小学生をもつ母親への日本での調査をもとに、母親が子どもとのコミュニケーションを日誌形式で記録する「振り返り活動」に注目したタクト養成プログラムを考案した。

(4)場の創出と言語活動の関係についてドイツの歴史人類学の分野で研究の進んでいる、「儀礼的行動におけるパフォーマンスの模倣(ミメシス)としての学習過程について、日独国際ワークショップを実施した。タクトが家族とのコミュニケーションをはじめ日常の儀礼的行動のなかでどのように養成されていくかを中心に、歴史人類学研究的手法による研究成果について討議し、タクト養成プログラムの開発にさらに検討を加えた。日独比較調査を通して明らかになった、言葉による表現や感情の共有など、「場」の創出にかかわる諸要素について、個別経験の振り返りや、明日への期待や展望のイメージ化の際に手掛かりとして押さえていくことが可能となるようなプログラムの有効性を確認した。経験の省察にかかわる観点と、未来への展望を思い描く際にかかわる観点とは密接に関係している。この観点そのものを自覚化し、振り返りと展望のイメージ化の過程を支援するようなプログラムは、タクトに関する

研究の確立者と評価されるヘルバルトが、ライプニッツの結合法に触発され、トポロジーの働きを手掛かりに検討していたものでもある。親の教育力は、日々の子どものかかわりをもとに、経験記述と将来展望の観点を言語およびイメージによっていかに意識化していくかという、経験把握の「わざ」の修練・練磨の過程として捉えることが可能であり、東洋的な「わざ」修練を基礎とした養成プログラムとして国際的に発信していく価値がある。本研究の成果の一部は、ドイツ語圏での招待講演および歴史人類学の専門家による教育人類学事典「タクト」の項目の執筆等を通して発信することができた。今後は、国内外でのワークショップ方式での発信を重ねつつ、調査とワークショップを連動させたプログラムの精密化が重要だと考える。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計3件)

Suzuki, Shoko (2013). Takt. In: Christoph Wulf/ Joerg Zirfas (Hrsg.) Handbuch Paedagogische Anthropologie, Springer VS, Wiesbaden, P.295-301. 査読有。

Suzuki, Shoko (2013). Wisdom on the Pursuit of Happiness in Daily Life: Christmas Celebration in the German Family, Susanne Klien/Christoph Wulf (Hrsg.) Paragrana-Internationale Zeitschrift fuer Historische Anthropologie, Band 22, Heft1: Well-Being – Emotions, Rituals, and Performances in Japan, P.235-248. 査読有。

鈴木晶子(2014). 教育にとっての「個と普遍の間(あわい)」. 『教育哲学研究』第109号(印刷中) P.1-6. 査読無。

[学会発表](計6件)

鈴木晶子(2013). 個と普遍を繋ぐ - 「教える思想」の問題系, 教育哲学会第56回大会研究討議「『教えること』と『学ぶこと』 - 教育的関係の再構築」2013年10月12日、神戸親和女子大学。

Suzuki, Shoko (2013). Takt- Research in educational studies today, Fakultät Erziehungswissenschaften Institut für Allgemeine Erziehungswissenschaft, Technische Universität Dresden, 25. June 2013.

Suzuki, Shoko (2013). Die Ernährungspädagogik in Japan, Die Gabe der Nahrung. Interdisziplinäre Perspektiven auf Essen, Nahrung und Ernährung als Bildungsraum, 20. - 22. June 2013, Domäne Dahlem, Berlin.

Suzuki, Shoko (2013). Die pädagogischen Aufgaben im Post- Fukushima- Zeitalter

und „Panbiontologie“, Internationale Konferenz der Koreanisch- Deutschen Gesellschaft fuer die Erziehungswissenschaft, Fukushima und pädagogische Verantwortung – Nuklearkatastrophe von Fukushima als pädagogische Herausforderung?, 25. May 2013, Inha-University, Incheon, Korea.

Suzuki, Shoko (2012). Research of Takt in Japan and Germany, Symposium “Meditation in Religion, Therapy, Aesthetics and Education, 12. May 2012, FU Berlin, Germany.

Suzuki, Shoko (2011). Takt as an Art of Body Sensation - Connecting Economics and Ethics, 10th East West Philosophers' Conference, University of Hawaii, 21. May 2011.

[図書](計4件)

鈴木晶子(2013). 『知恵なすわざの再生へ 科学の原罪』ミネルヴァ書房、P.1-302.

Suzuki, Shoko u. Wulf, Christoph (2013). Auf dem Weg des Lebens – West-oestliche Meditation, Logos Verlag, P.1-130.

鈴木晶子・クリストフ ヴルフ編(2013). 『幸福の人類学 - クリスマスのドイツ・日本の正月』、ナカニシヤ出版、P.1-195.

Suzuki, Shoko. Christoph Wulf u. anderen (2011). “Glueck der der Familie VSVerlag fuer Sozialwissenschaften, Wiesbaden, P.1-308.

6. 研究組織

(1)研究代表者

鈴木 晶子 (Suzuki Shoko)

京都大学・大学院教育学研究科・教授

研究者番号：10231375

(2)研究協力者

Wulf, Christoph

ドイツ・ベルリン自由大学・歴史人類学

学際研究センター・教授

(3)研究協力者

Zirfas, Joerg

ドイツ・ケルン大学・人間科学部・教授